Education magazine（尾花沢市教育委員会通信）

輝け！おばねっ子

第６１号
令和７年３月24日
※毎週月曜日発行予定です

～尾花沢の未来をひらくいのち輝く人間の育成～

これまでの「輝け！おばねっ子」は上のQRコードからご覧いただくことができます

卒業式の最後の学級活動で、私が担任した生徒に「親のこんな気持ちを理解してほしい。将来、こんな思いをもって親になってほしい」と願いを込め、紙面にしてプレゼントしていた文章を紹介します。

「いのち」の記憶　沢木耕太郎

2005年1月23日　日本経済新聞

子供のころ，朝早く起きなくてはならないことがあると，私は父に向かってよく頼んだものだった。

「明日の朝，起こしてくれる？」

そう言って，起こしてもらいたい時刻を告げる。すると，父はうなずき，それがたとえどのような時刻であっても必ず起こしてくれた。私は起こしてもらうたびに不思議に思ったものだった。お父さんはどうしてこんなに早い時間に起きるのだろう？

やがて，私も父親となると，子供に頼まれることになった。

「明日の朝，起こしてくれる？」

◎　◎　◎

そして，気がつくと，子供に言われた時刻に起きて，子供を起こしている自分がいた。自分が親になってみると，子供のために朝早く起きるなどということは，少しも難しいことではないことが分かる。しかし，起こされた子供の眼には，恐らく子供の頃の私が浮かべていただろうものと同じ種類の不思議そうな光が宿っている。お父さんはどうしてこんな早い時間に起きられるのだろう？

もし，子供に面と向かってそう訊ねられたら，どう答えていただろう。大人になると目ざとくなるのさ。あるいは，大人になると責任が増すのさ，とでも答えていただろうか。しかし，どれも違っているような気がする。親にとっては子供に頼まれたことをするのが少しも苦痛ではないのだ。もしかしたら，それは「喜び」ですらあるかもしれない。

あるいは，私の子供の頃の食卓での記憶に，こんなものがある。食べ盛りの私のおかずの皿に何もなくなってしまうと，母が自分の皿から肉や魚を私の皿に移してくれて，言う。

「食べなさい」

そのときも，子供のころの私は思ったはずだ。お母さんはおなかがすかないのだろうか，と。

そして，気がつくと親になった私も母と同じようなことをやっていた。年を取ると，育ち盛りのときほどの食欲がなくなっているということもあるだろう。だが，それだけでなく，なにより子供がおいしそうに食べている姿を見ることは自分の「喜び」であるからだ。

◎　◎　◎

ある意味では，**親は子に，「睡眠」や「食物」を削って，与えていると言えなくもない**。だがそれは**親の「義務」だからというのではなく，「喜び」であるからだ**。それを**愛情といってもよい**。しかし，大方の親たちは，それを**愛情とも意識しないまま，ごく普通に行っている**。「睡眠」を削り，「食物」を削るということは，「生命」を削るということと等しい行為である。**自分の命を削って，子に与える。それが何でもないことのように行われることによって，「いのち」もまたごく自然に伝えられることになる**のだ。

しかし，もしも何かの理由でそれがうまくいかなくなったとしたら？

かつて私は，家庭というものに襲いかかる最も悲痛な出来事は何だろうと自問し，その最大のもののひとつは幼い子供を不意に失ってしまうことではないかと自答したことがある。たとえそれが病気によるものであれ，事故によるものであれ，場合によっては犯罪によるものであれ，不意に幼い子供を奪われること以上に家庭を苦しめるものはないのではないかと考えたのだ。

しかし，そのときの私には，自らが手を下して幼い子供を傷つけたり，殺めたりする父親や母親がいる家庭のことはまったく視野に入っていなかった。そんな父親や母親が存在するのは遠い外国の社会，たとえばアメリカのような社会だろうというくらいに思っていた。

ところが，ここ数年，日本のさまざまな土地で幼い子供への虐待の存在が明らかになるにつれ，この国においてもその病根はすでにかなりの深さに達していることを認めざるを得なくなってきた。もしかしたら，家庭における最も悲痛な出来事とは幼い子供に対する虐待であるのかもしれない，と思うほどに。

◎　◎　◎

幼児ならともかく，学齢期になるような子供が，どうしてそれほど苛酷な仕打ちを受けながら，逃げ出したり，誰かに告げたりしないのかという意見がある。だが，それは，たとえどのような親であれ，幼い子供にとって，親は圧倒的な存在だということを考慮に入れていない浅はかな意見だと思われる。実際，私たちが幼かったころのことを考えてみればいい。自分を取り囲む世界の中で父親や母親の存在がどれほど大きいものだったか。夜中にふと目が覚め，もしお父さんやお母さんが死んでしまったら自分はどうなるのだろう，と途方に暮れつつ思いを巡らせたことはないだろうか。その父母に，さらに暴力が加われば，それは絶対的な存在になってしまう。幼い子供たちに，自力でその引力圏から脱する勇気や知恵を持つことを求めるのは酷な話なのだ。たぶん，子供を虐待する父親や母親は，自分が親から「いのち」を与えられた記憶が希薄な人たちなのだろう。

親から「いのち」を与えられた記憶は，自分の子へ「いのち」を与える行為につながっていく。つまり，それは**「いのち」をめぐる記憶の連鎖とでもいうべきもの**だ。もし，その記憶の連鎖が途切れたら，人間にとって何よりも大切なはずの「いのち」の連鎖もまた途絶えてしまうのかもしれない。

【担当】尾花沢市教育委員会こども教育課
教育指導室長　工　藤　雅　史
ＴＥＬ　２３－３３３０